

2014年6月6日掲載

## 「プロ」としての意識

先日、式の司会で紹介する方の名前を間違えてしまった。その方や会場のスタッフらなどに謝罪したが、担当者から「プロとしての意識が甘いのでは」と厳しい言葉を頂いた。

それもそのはず。会場側は最高の式になるよう準備を重ね、当日を迎えているのだ。ミスは誰でも起こす可能性がある。しかし、私は「プロ」として話す仕事をし対価をもらっているのだから、それは言い訳にすぎない。ミスは、私の油断や慣れが引き起こしたように思う。

以前、江別市の大学でキャリア支援の担当者が、「プロとは高い技術を持った人だけではない。社会で働く人は皆プロだ」と話してくれた。だからこそ、大学時代にあいさつなど基本マナーを当たり前でできるようにし、困難も一歩ずつ乗り越えて”アウェー”を”ホーム”にしていく。そんな「プロの学生」を育てたいとの話を聴いて触発された。誰でも「プロ」になれるのだ。

その後、「プロに必要なものは何か」という観点でさまざまな人を観察し、「お客様のため」という気持ちであることに気付いた。ファストフード店のある店員は、長蛇の列の中、客がずっとメニューを悩んでいたにも関わらず笑顔で対応し、客も丁寧な接客を喜んでいった。また、私が通っている美容院の担当者は、前回のささいな会話も覚えてくれてうれしくなり、いつも会話が弾む。

どんな仕事にも相手がいる。その相手のために行動する「プロ」として、さらに仕事に励んでいきたい。

(毎日新聞より)